

芦安ファンクラブ通信



第9号(春)

発行者：
芦安ファンクラブ
山梨県中巨摩郡
芦安村芦倉
1589-8
事務局情報係
(大滝)
055-288-
2531

「二〇〇二開山祭」 に寄せて

芦安村長 清水哲夫

半年以上雪に閉ざされていた、南アルプスの登山口「広河原」も新緑が美しくなり、本格的な登山のシーズンが訪れました。

「二〇〇二開山祭」を開催するに当たり、知事代理の富田出納長を始め、近隣町村長更に関係各位のご臨席のもと開催できます事は主催者としてこの上ない喜びであります。

もとより、先人達の遺徳を偲び、山を愛する人が尊い命を失った霊を慰め、今年の安全登山を願うものであり数年来に渡り開催をして参りました。

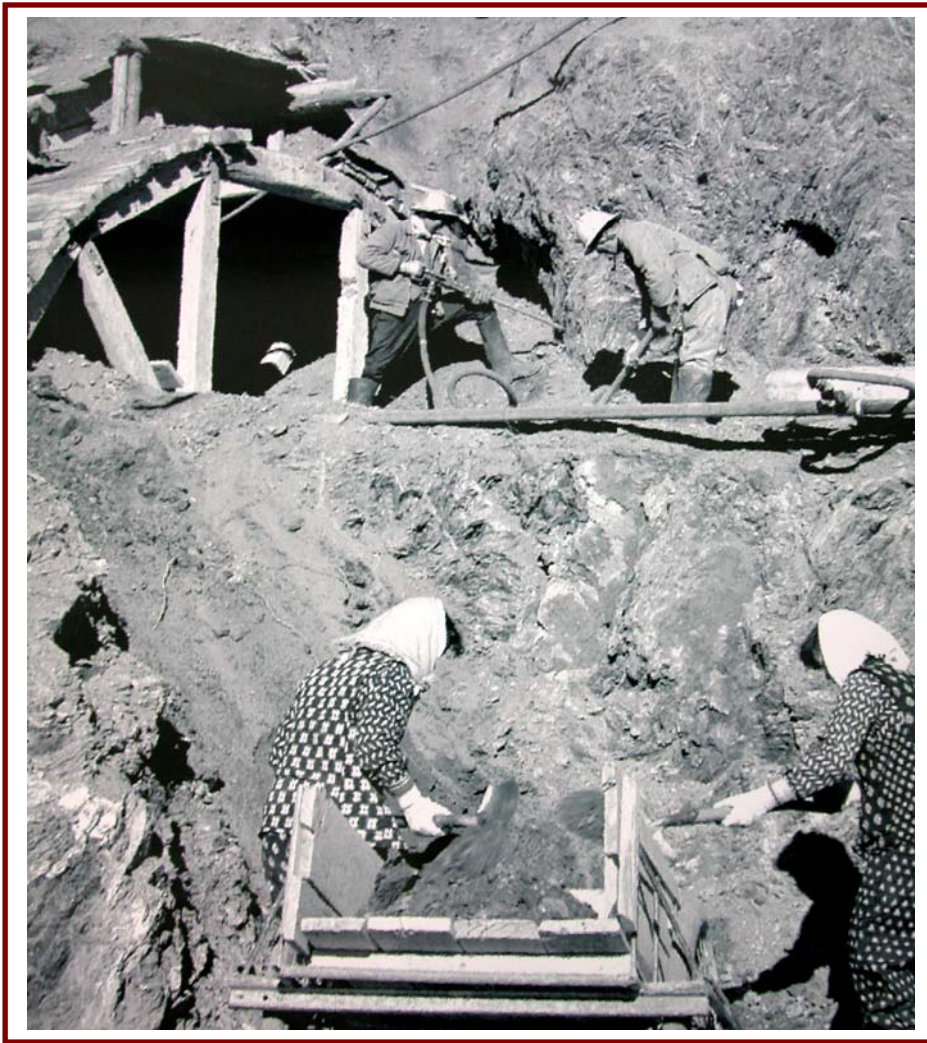
特に今年は、広河原までの南アルプス林道(旧野呂川林道)が開通して四十年に当たる節目の年でもあります。昭和二十七年七月当時の知事、天野久氏の提唱する「富める山梨」の実現を目指して奥地開発林道施設として着工、総工費十億五、九百万円の巨費を投じ、実に約十年の歳月を経て完成を見ました。

その陰には、尊い十二名の若い殉職者があつたことを忘れてはなりません。

その頃、本村は林業の衰退など経済的な手詰まりから着工前年の二十六年には十二世帯六五人を山口県に入植者として送り出した年でもありました。林道工事が始まると村民働ける者は工事に従事し、その甲斐あつて村民生活に経済的な大きな効果をもたらしました。約十年後の三十七年十月には広河原までの二

万二千七百十九mの完成を見ました。その事により村は大きく変貌を遂げることとなりました。

イカーで入れるようになり、大衆登山の基地として今日に至っております。五十四年度には「自然保護か開発か」で、全国的に話題となった当時のスパー林道も全線開通し、長谷村と本村との長野県境北沢峠までの村営バス運行も開始し、仙丈岳及び甲斐駒ヶ岳へのアプローチも非常に短くなり、登山客も大幅に増えてまいりました。



トンネル工事作業中のひとコマ (昭和30年頃)

三十九年には、南アルプス国立公園に指定され、白鳳溪谷として多くの人に親しまれるようになりました。一日かかった道のりも車で僅か一時間に短縮され、誰でもマ

現在、五十万近い国立公園の利用者がこの林道を使い、ハイキングに登山にと本村を訪れております。この事を思うときに観光を主産業として位置付けている本村に

とつてこの林道の果たす役割は図り知れないものがあります。今後、中高年の登山ブームや自



「つる払い」のパフォーマンスにより山開きになる

然志向の高まりから利用者は増加するものと思われま。常日頃、その維持管理にご尽力を下さっている県当局に改めて感謝を申し上げます

又、この開山祭の記念行事として、芦安ファンクラブの皆様の協力による「キタダケ草観察会」が三十名近い参加者を迎え開催される事を心より歓迎し感謝を申し上げます。

南アルプスが世界に誇れる景観・高山植物群などの大切な自然を守り後世に引き継いでゆくことは地元を預かる我々に課せられた責務であると開山祭を迎えるごとにその責任の重大さを痛感致します。

芦安村としての開山祭は今回が最後になると思われますが、いつまでも地域色を出し継続出来ることを願ってやみません。

結びになりましたが、開催するに当たり多方面にわたりご協力頂きました関係各位に敬意と感謝を申し上げ挨拶と致します。

二〇二〇南アルプス

開山祭に寄せて

山梨県知事 天野 建

二〇二〇南アルプス開山祭「おめでとございませう。」

昨年、新緑の素晴らしい南アルプスの登山口、広河原で開催した開山祭に出席し深い感銘を覚えたことが、昨日のことのように思い出されます。

南アルプスは、日本の屋根と言われる大構造山地であり、富士山とともに山岳県山梨が誇る名峰揃いの山脈です。

本年は、誰もが登山口、広河原まで車で来れるようになった、野呂川林道（現南アルプス林道）が開通して四十周年にあたります。私の父天野久が困難な工事に命を懸けたと言っても過言でない事業でした。

私も昨年、芦安村長と素晴らしい渓谷の景色を見ながらこの林道を広河原まで行きました。感慨深いものがありました。

途中、昭和三十二年に観音経における昭和天皇皇后陛下の行幸啓碑や鷹巣における工事の殉職者碑など、当時の難工事の姿と素晴らしい大自然にふれられる機会を改めて実感致しました。

観音経で見た大樺沢の大雪渓、深い野呂川の谷間とまだ雪を頂いた北岳を始めとする南アルプスの山々、間近で圧倒される山容を見て登山者のあこがれる思いが理解できました。

また芦安村の環境保全と地域の活性化に取り組む「芦安ファンクラブ」が五月二十九日に特定非営利活動法人として認可されこの開山祭が法人として初の大事業と聞いております。

開山祭では蕎麦打ちやキタダケソウ観察会など重要な役割を担うそうですが、南アルプスの自然を守ることが芦安村



の活性化につながると思っています。

今後のご活躍を期待しております。

今年も夏山シーズンを迎え、多くの登山者が入山いたしますが、地域の皆さんとともに貴重な高山植物の保護や山岳環境の保全、また登山者の利便の確保など多くの取り組みをして参りたいと考えています。

本日の開山祭が、芦安村として最後の南アルプス開山祭となりますが、来年からは新しい市の、山岳観光拠点として更なる発展の契機となりますようご祈念申し上げます。

現在の南アルプス登山の隆盛に多くの汗を流していただいた皆さんに感謝申し上げます。



白鳳峠からの北岳

から、お祝いの

さつと致します。

新緑の茅ヶ岳に「第六回南アルプス芦安登山教室」を展開

芦安ファンクラブ主催、芦安村協賛の第六回南アルプス芦安登山教室が、五月二十五日、二十六日の二日間にわたって開催されました。

一日目は、芦安村交流センター「ふれあい館」で講演会と講習会が開かれました。講演会は日本山岳会会員、「日本百名山」担当編集者 大森久雄氏を御招きして「深田久弥と百名山」という題目で故深田久弥氏の知られざる素顔をお話ししていただきました。講習会は山用品の店「エルク」社長 柳沢仁氏から最新の登山装備のポイントを教えていただきました。

二日目は、登山実地研修が行われ、深田久弥終焉の山「茅ヶ岳」へ登りました。大明神深田記念公園で準備体操後、参加者四十三名、スタッフ十七名が七班に分かれ、晴れわたった青空のもとスタート。新緑がまぶしく、ツバメオモト、ササバギンラン、マイヅルソウ、ヒメイワカガミなどの可憐な花が迎えてくれました。女岩の冷たい水で喉をうるおし、コルまでの急坂では口数



新緑の中を歩く参加者

こそ少なくなりましたが一歩一歩頑張つて、標高一七〇四メートルの茅ヶ岳に全員元気に到着することができました。山頂はちょうどミツバツツジが満開、ヤマツツジも咲き始めており、八ヶ岳や富士山など素晴らしい展望も楽しめました。ゆっくり休み、班ごとに記念撮影をした後、金ヶ岳へ向かいました。



ミツバツツジと茅ヶ岳

一七六〇メートルの金ヶ岳山頂では、ゆつくりと弁当を広げる人、コンパスの使い方を習う人、地図の読み方を復習する人など思い思いに一時間を過ぎ、バスの待つ明野ふれあいの里に全員無事下山しました。途中雲行きが怪しくなり雨具の世話になった人も多かったようです。

参加者からは、今後の希望として「北岳」という声が高いので、スタッフもそれを実現してゆくべく努力を重ねております。次回の登山教室は、第十一回ボランティアフェスティバルに協賛して、芦安を十分理解していただくために、世界的山岳写真家 白旗史朗氏の講演を軸に、南アルプスの展望台夜叉神峠まで樹木の名札をつけながらの登山や、さまざまなイベントを用

意しておりますので、多数の参加をお待ち
しております。

NPO法人芦安ファンクラブ 雨宮記

南アルプス林道開通四〇周年を迎えて

『野呂川開発を思い、新しい行政の枠組みに期待する』

南アルプスは日本を代表する山々を擁し、今では四十万人もの人々が訪れる山岳地帯である。しかし、雄大で豊かな自然が残された山脈に誰でもがは入れるようになったのは、まだ最近のことである。

百年前の一九〇二年に南アルプスを世界に紹介したウォルター・ウエストンは、横浜の自宅を出て北岳登山を果たし、帰るまでに、十日間を要している。

戦後、大学や高校の山岳部等の登山が盛んになったが北岳に入るのは、夜叉神峠を越え、深沢を下って池山吊り尾根を経由しての大きかりな登山である。一般の登山愛好家が気軽に南アルプス登山が出来るような状況ではなかった。このような山深く、登山口まで行くのも困難な山を、誰でも身近に親しめる雄大な山々にしたのが、昭和二十六年知事になった天野久である。

早川及び上流の野呂川流域の奥地深く眠る水資源、木材、観光資源等の豊富な未利用資源の開発利用と、原七郷地帯の多年の要望であった野呂川疎水問題の解決をするため「野呂川流域総合開発計画」を立案。その内容は、①早川流域の電源開発、②野呂川林道（現南アルプス林道）の開発、③原七郷の上水道完備と下流湿地地帯の土地改良であった。これはエネルギー資源としての電力開発とその利用で県財政基盤と産業の振興を図ると共に、発電所の建設に伴う道路の開設で森林資源、観光資源を開発し地域住民の生活環境向上を図ることであった。

また、ダムの建設により洪水調節、砂

礫硫化を防ぎ、災害を防止するとともに、発電用水の水利権と引き替えに、いわゆる「野呂川ばなし」として三百年来「出来ない相談」の代名詞とさえなってきた、懸案の原七郷の生活用水確保と土地改良によって下流の湿地解消と地方病の撲滅を目指すのが目的であった。

南アルプスの登山者は、芦安から登山口広河原まで僅か一時間で当たり前のように車が入っている。しかし、この林道工事は十年余の歳月と十二名の尊い命を犠牲にして完成したのである。脆弱な岩盤を掘削し、芦安村の女性達も工事現場で汗を流し、当時林道としては日本一の夜叉神トンネルなど二十二のトンネルと深い溪谷に十六の橋梁を設置して昭和三十七年秋竣工し、今年には林道開通四〇周年を迎えることが出来た。



急峻な山斜面に挑む人夫衆 全てが人力であった

その後昭和四十二年には広河原から長野県長谷村までの南アルプス林道に着工、五十五年には村営バスの運行も行われ、甲斐駒ヶ岳、仙丈ヶ岳への登山が容易になり、南アルプス登山の大衆化がより進み百名山や中高年の登山ブームと重なり南アルプスの活性化に寄与している。

また、今年には南アルプスを世界に紹介したウォルター・ウエストンが北岳に登山して一〇〇周年でもある。ウエストンは北岳登山に十日を要したが、今私達は僅か一泊二日で行くことが出来る。もちろん野呂川林道のお陰である。またこの林道は脆い岩肌が多いため維持管理を行う関係機関の苦労は相当なものである。安全で快適に雄大な南アルプスの懐に飛び込んでいける便利さに改めて感謝と敬意を表したい。

野呂川林道は奥地森林開発と観光振興のため開発されたが、木材生産は昭和四十二年をピークに減少し現在では観光振興路線として多くの登山者に感謝されている。また野呂川流域の発電所建設に伴い電源開発道路（現県道南アルプス公園線）は秘境奈良田から広河原まで建設され野呂川林道と接続、奈良田環状路線を形成しているが、まだ一部未舗装など未整備部分もあり利用者は少ないが、これが整備されると、南アルプス大パノラマ循環道路として多くの観光客に親しまれることになる。

発電事業は膨大な資金と高度の技術が要求され当時は困難な事業と思われていたが、関係者の献身的努力により西山、奈良田第一、第二、野呂川と四つの発電所を建設、当時は県内のほとんどの電力をまかなえるぐらいの発電量であった。

この発電所の建設では、飲料水として野呂川の水をトンネルで峡西地方まで引

こうとする原七郷住民が持っていた水利権を県が譲り受け変わりに野呂川上水道の建設。また下流の湿地地帯には土地改良事業と三百年来の両者の要望を満たす事になり、野呂川問題に終止符が打たれた。今では、スイッチをひねれば電気がつき、蛇口をひねれば水は勢い良く出ます。林道も車で快適に利用することが出来ますが、多く関係者の血と汗の結晶であることを忘れることは出来ない。

この地域は来年四月から新しい行政組織として新市を発足することになりました。芦安村の野呂川が結ぶ壮大な事業がここに収斂されるのであると思うのである。芦安村は南アルプスの登山口としてまた多くの山小屋を有し登山者とともに地域の活性化を図ってきたが、本年は芦安村最後の開山祭となる。

今年にはこれら関係町村の皆さんが出席し南アルプスの麓、野呂川の辺での開山祭を行うが、これを機会にもう一度、工事関係者や現在も環境を守り安全管理に携わっている皆さんに感謝するとともに、二十一世紀の大イベントとして定着できるような開山祭の大成を期待してやまない。

NPO法人芦安ファンクラブ 仲田記

特定非営利活動法人

芦安フアンクラブ 成立する

芦安フアンクラブも設立以来四年目を迎え、ますます活動も活発化して参りました。そこで会員の皆さんの総意を得て、去る三月十七日芦安村交流センター「ふれあい館」法人化に向けた設立総会を開催し、三十五名の会員をもって「特定非営利活動法人芦安フアンクラブ」を設立する旨、議決いたしました。

三月二十日、県の指導を受けながら、法人の設立認証申請の関係書類を山梨県知事宛提出しました。二ヶ月の公示期間を経過し五月二十二日に知事から認証通知をいただき、五月二十九日事務局に登記を致しました。この結果この日をもって法人として成立しました。今後は従前に増して責任の重さと、多くの皆さんに愛されるフアンクラブとして活躍していかねければとの決意を新たにしたところであります。この法人は、芦安村の自然を愛する全ての人達に対して、地域の人々との交流を通じた南アルプスの環境保全及び適正利用に関する事業を行い、もって芦安村の活性化に寄与することを目的としております。そのため具体的な事業としては、

- (一) 特定非営利活動に係る事業
- (二) 南アルプスにおける自然保護に関する事業
- (三) 自然保護に関する調査及び研究事業
- (四) 芦安村及び南アルプスの文化と歴史の承継に関する事業
- (五) 南アルプスの利用者のための受託事業
- (六) 安全登山に関する事業
- (七) 地域交流及び地場産業の発掘と活性化に関する事業
- (八) この法人の活動に関する普及啓発及び機関誌の発行事業

(八) その他目的達成のために必要な事業

- 収益事業
 - (一) 物品販売業
 - (二) 観光事業
- を行うこととしています。
 - ① 社会学的信用が高まる
 - ② 契約や所有の主体となる
 - ③ 会員や協力者を得やすい
 - ④ 権利義務が明確になる
 - ⑤ 非営利であることの理解が得られる
 - ⑥ 寄付金、公的支援が得やすいなどのメリットがあります。

入会金	千円
年会費	五千円
賛助会員 年会費	千円

いづれも本会の趣旨に賛同される方を会員としますが正会員は毎月の例会や各種行事に積極的に参加される方々を主な対象としております。また賛助会員は「芦安フアンクラブ通信」の送付を受けられ、フアンクラブが行う行事に都合の良いときに参加することが出来ます。いづれも法人の目的に賛同し積極的に活動参加し、運営に協同して協力していただくことが必要ですが入退会は自由に出来ます。

素晴らしい南アルプスの自然と芦安村の人間味あふれる人々との交流を通じ楽しい活動が続けられることを期待します。芦安村は平成十五年四月一日には周辺六町村で新しい市制に移行することになりました。今後は芦安村の皆さんと地域の活性化のため出来るだけのお手伝いをしながら、南アルプスを訪れる皆さんの受け皿としても活躍の場を見いだしていきたいと思えます。さあ皆さんこれからは法人の構成メンバーとして責任を持った活動を楽しく有意義に行おうではありませんか。

NPO法人芦安フアンクラブ 仲田記

「第十五回新緑まつり大盛況」

春が遅れ、大雨になってしまったあの時から早くも一年、どんぴしゃの新緑晴天の五月三日、恒例行事「芦安村新緑まつり」が、中学校周辺で、盛大に開催されました。この新緑まつりは、村民と都市住民とのふれあいの場であり、芦安村を広く県内外にアピールし、今後の村の活性化と観光事業の振興を図ることを目的としており、今回で十五回を数えます。

今年も天候が心配されましたが、当日は今までない好天に恵まれ、まばゆいばかりの新緑でした。開会式には県関係の皆様、合併が決定した峡西六町村の町村長、議長様をはじめ多くの来賓をお迎えし、花



多くの人々を魅了した松原のぶえさ

を添えていただいた夜叉神太鼓演奏、舞踊披露で盛大に幕が開きました。県内外から十五名が参加したカラオケ大会では、ハイレベルな歌唱力が披露され、会場の皆さんも真剣に聞き入っていました。楽しいセーラーマンのキャラクターショーに子供達は大喜びでした。メインイベントの松原のぶえ歌謡ショーには、グラウンドいっぱいになる程の人が新緑の谷間にこだまするプロ歌手の歌声に酔いしれていました。



グラウンドを埋め尽くした参加者の皆さん

マスのつかみどり、ミニ新幹線コーナー、だるまおとしゲーム、竹細工の体験教室などのコーナーがあり多くの子供たちで賑わっていました。

メイン会場内のテントには多くの村内関係者に出展していただき、山菜、特産物販売、フリーマーケットなど一層お祭りムードを盛り上げていただきました。中でもひととき長い行列のテントが、芦安フアンクラブに協力していただいた

手打ちそばの会「甲斐ヶ峰庵」でした。昨年の雨の中でも好評だった手打ちそばを今年も楽しみにしていた方も多く、早いうちからそばをすすする光景が、会場あちこちに見受けられました。村民と都市住民とのふれあい、地域活性化というこの新緑まつりの本質が、こんな部分にも感じられました。芦安村としては最後の新緑まつりとなる訳ですが、地域に根付いたこのすばらしいお祭りを、更に充実させて行くのが私達の使命ではないかと思えます。今回の新緑まつりも盛大のうちを終えることが出来ました。ご協力頂いた各種団体の皆様にお礼申し上げます。

芦安村役場企画観光課 清水記

『苗木フェスティバル』に向けて

九月二十一日～二十二日に行われる「全国ボランティアフェスティバル」イン山梨・芦安部会のイベントに向けて様々な企画が準備されています。

その中に芦安ファンクラブが担当する「森林啓蒙ボランティア」があります。これは夜叉神峠までの樹木にネームプレートを掛けて森林学習のお手伝いをするというものです。当日のテーマ別のついで「夜叉神峠ハイキング」では登山しながら手作りのプレートを参加者に取り付けてもらう事になります。いわゆる「参加型ボランティア」の実践です。

(5) その為の調査登山が去る五月二十八日行われました。長く山から離れていた私はまったく自信が無く、当日まで気が重くやや後ずさり気味でした。しかし晴天の当日は木々の若葉を木漏れ陽が透かし、活きとした木々の中に一歩入ると自分が山に吸い込まれていくような、そんな不思議な木々の力に重い気持ちも春風と一緒にどこかに飛んでいってしまいました。調査には峡中地域振興局・林務環境部計画管理担当・中井副主査、同自然保護担当・小松沢主任の専門家お二人と芦安ファンクラブのメンバー九人に森本住民環境課長と私が同行しました。予定するプレート五十枚分の樹木名・科名を調査し、それぞれの木々にテープを取り付け、その場所を地図に記入する作業を繰り返します。初めて聞くような名前の木があったり、あらためて覚えなおす花たちの名前の連続でした。さすがに「プロ集団」おみそれ致しました。快い風に吹かれながら、樹木や花の名前を覚えられた事はもちろんですが芦安の山、芦安の自然に触れた事、芦安ファンクラブの皆さんと和気あいあいの楽しい登山が出来

た事が大変有意義な一日でした。今回の大きなイベントを成功させる事はもちろんですが、それにいたるプロセスの大切さを痛感させられた一日でした。



心地よい新緑の中で木々の調査をする参加者

「よつちやばれ山梨へ」が今回のキャッチフレーズです。参加する全ての皆さんのお祭りです。主役になり、大いに楽しむのも皆さんです。♪人は石垣人は城♪(武田節)と歌われるように、人と人との連帯感を大切にしながら、熱いボランティアの心で「第十一回全国ボランティアフェスティバル」を皆さんと共に成功させていきたいと思えます。今回の作業に快く協力していただいた峡中林務環境部の皆さん、ありがとうございました。芦安ファンクラブの皆さん、お疲れ様でした。またそれぞれの立場で準備に関わっている皆さんご苦労さまです。より多くの参加者の来村と芦安らしい有意義な大会になることを祈念しながら文を綴じたいと思います。

芦安村社会福祉協議会 望月記

『キタダケソウの保護について』

芦安村の花に指定されているキタダケソウは、氷河期からの遺存植物で、この地球上で、芦安村の北岳山頂にしか生育しない非常に貴重な植物です。

キタダケソウは昭和六〇九年に横浜に住む清水基夫氏によって世に出されました。氏はこの経緯を発表した時から「貴重な花なので大切に守って行こう」というコメントを出していましたが、それとは裏腹に、山野草ブームにより盗掘され絶滅の危機に瀕しております。

そこで山梨県は、このような状況から貴重な花たちを守ってゆくために、昭和六十年「山梨県高山植物保護に関する条例」を、さらに環境庁(当時)は平成六年に「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律(種の保存法)」を制定しました。特にキタダケソウは、その生育地が「生育地保護区」(三十八・五ha)として指定され登山道を除くその全域が立ち入り禁止の措置がとられ保護がはかられております。

また、芦安村は、環境省の委託を受け「生育地保護区」のパトロール・生育調査、登山者指導、その他あらゆる機会を通じて、積極的に保護活動に取り組んでおります。しかし、将来的には、盗掘や登山者による踏みつけ以外にも生育地の一部崩壊や地球温暖化、降雨(雪)形態の変化等の気候変化や酸性雨の問題など、高山植物を取り巻く環境の悪化が予想されます。そこで、弥生時代の米の種子が現在でも発芽することを考えれば、キタダケソウも、良好な種子を保存して、この美しい花を未来に残して行く方法を探るため、昨年環境省は「キタダケソウ保存研究会」を立ち上げました。

「芦安ファンクラブ」のメンバーもこの研究会に加わり、頻繁に生育地まで登り、個体数の把握、開花、結実状況の調査、また研究室での発芽、生育等の研究を専門家と共に積極的に進めて降りますが、キタダケソウの生育のメカニズムは非常に複雑で、良好な種子を「ジーンバンク」として後世に残して行くのには、現時点では、媒介昆虫、人工交配、発芽のメカニズム、増殖の研究等まだまだ克服しなければならぬ多くの課題がありますので、今後も根気強く取り組んで行かなければなりません。

NPO法人芦安ファンクラブ
塩沢(久)記



キタダケソウ保存研究会会議

平成十四年二月